



独立行政法人地域医療機能推進機構
Japan Community Health care Organization : JCHO

大阪病院
Osaka Hospital

オープン・コム

Take
Free

Open Com

開放型病床を持つ開かれた病院として、
地域の先生方や住民の皆様とコミュニケーションを図り、
心かよう安心の医療を目指します。

2021

No.46

特集

母子医療センター

ミニ特集

フットケアチーム



JCHO 大阪病院 母子医療センター

母子医療センター について

産婦人科医師、小児科医師、助産師、看護師がチーム医療で連携し、妊婦さんと胎児、そして生まれてくる赤ちゃんに関わる周産期医療を行うセンターです。大阪市西部の地域周産期センターとして年間約 500 件の分娩を取り扱っています。正常妊娠だけではなく、ハイリスク妊娠の管理も行っています。また、NICU(新生児集中治療室) 6 床があり、早産児・低出生体重児・呼吸障害の新生児などの治療を行っています。

基本データ

2020 年 12 月現在
・産婦人科病棟病床数：20 床
・NICU 病床数：6 床
・産婦人科医師 8 名 / 小児科医師 12 名 / 助産師 29 名 / 看護師 10 名

◆産科の役割

オープンシステムを導入しています

妊婦健診は平日の午前中ですが、妊婦さんの利便性を考慮し、合併症がなく妊娠経過が順調であれば近隣のクリニックで妊婦健診を受けていただき、妊娠後期から当院で妊婦健診を受けていただくシステムです。

当院は、産婦人科医師が常時院内に待機していますので、分娩予約をいただいている妊婦さんは、通院中のクリニックが休診の際には当院で対応いたします。

合併症*のある妊婦さんの受け入れも行っており、合併症の診療科と連携し妊婦健診・分娩を行っています>(*合併症によってはお受けできないこともありますので、まずはご相談ください。お受けできない場合は、適切な施設にご紹介させていただきます。)

■LDRシステム(LDR室)(図1)

分娩の際には、LDR 室にて陣痛(Labor)・分娩(Delivery)・回復(Recovery)の時期を1つのお部屋で過ごしていただきます。LDR 室では 24 時間面会が可能で、ご家族の分娩立ち会いも可能です(現在は、新型コロナウイルス感染予防のため、すべての面会・立ち会いをお断りしています)。

骨盤位(逆子)や前回帝王切開でご出産されている場合などは、帝王切開での分娩となります。また、合併症などのため、医学的に無痛分娩が必要と判断される場合には、計画的無痛分娩も行っています。



図1 大きな窓に面した LDR

◆助産師の役割

— 助産師は出産時に赤ちゃんを取り上げるだけではありません

すべてのお母さんと赤ちゃんが、妊娠から出産、育児の期間、より健やかに安心して過ごせるよう、妊娠中の保健指導や産後の母乳支援、育児相談なども行っています。

▶アドバンス助産師がいます

社会の要請に応じた経験を積んでいるか、必要な研修を受講しているか、助産に関する知識や技術をブラッシュアップできているかなど、一定水準に達していると承認された助産師のことです。当センターには、現在(2020年12月現在)9名のアドバンス助産師が在籍しており、日々の助産ケアはもちろん、若手の指導教育にもあたっています。

— 普段、妊産褥婦さんと関わる際に心がけていること

基本的に自然分娩や母乳育児を推進していますが、それらに固執せず、できるだけお母さんの希望に寄り添い、お母さんと赤ちゃんにとっての「最善」を考えることを大切に、優しく温かいケアを心がけています。「ここで出産して良かった」と思ってもらえるよう、外来

助産師やNICU看護師とも連携をはかり、より質の高いケアを提供できるように努めています。

助産師は、妊産褥婦さんの気持ちに寄り添い、妊娠期から分娩・産褥期、育児期に至るまで、切れ目のない支援を行います。ご不安なこと等ありましたら、全力でサポートさせていただきます。

◆小児科の役割

小児科は必要に応じて分娩に立ち会い、生まれてきた瞬間から赤ちゃんの蘇生や処置、管理を行います。例えば早産児など、何らかの医療を必要とする赤ちゃんたちは、蘇生処置後、NICU(新生児集中治療室)(図2)で保育器へ収容、人工呼吸器の装着や点滴投与、経管栄養などの治療を行います。赤ちゃんたちが次第に回復し、自宅で安心して過ごせる状態になるまでの管理を小児科が担当します。



図2 NICU



大八木 知史 産科担当部長

— NCPRって何ですか？

Neonatal Cardiopulmonary Resuscitation: 新生児蘇生法の略です。我が国では、すべての分娩に新生児蘇生法を習得した医療スタッフが新生児の担当者として立ち会うことができる体制の確立を目指して、2007年からNCPR普及事業がスタートしています。当院でも周産期医療に関わる産科医、小児科医、助産師、看護師にこのNCPR講習会の受講を義務づけています。

— NICUを卒業した赤ちゃんはどうなるのですか？

NICU退院可能となった赤ちゃんですが入院期間が長い場合、母児分離期間も長くなります。



当院では、自宅に退院される前に、「さくらんぼ入院」という母児同室で過ごせる期間を設けています。1泊2日より、ご希望に添う形で母児同室をおこない、授乳指導や育児手技の獲得を、専門スタッフがお手伝いさせていただいています。

医療的な事はもちろんですが、生活や育児における支援など、何でも気軽にご相談いただけます。

また退院後は、必要に応じた赤ちゃんの診療、発育発達の観察などを小児科医が引き続きおこなっています。シナジスを含めたワクチン接種もおこなっています。

—シナジスって何ですか？

シナジスとは、RSウイルス感染症の予防を目的とした注射です。35週以下の早産で生まれた赤ちゃんや、心臓や呼吸器に病気がある赤ちゃん、免疫不全やダウン症の赤ちゃんなどが接種の対象となります。RSウイルスの流行する時期に、毎月1回、外来で注射をします。

◆NICU スタッフの役割

NICUでは専任の助産師・看護師が新生児のケアにあたっています。赤ちゃんのケアに集中しがちですが、赤ちゃんを支え

るご家族に対してもケアができるように日頃から心がけています。

■NICU 認定看護師がいます

専門知識・技術を用いて赤ちゃんの安定化を図ると共に、若手育成のための実践・指導・相談を行い、より良いケアをめざしています。

◆これから妊娠・分娩を考えている方へのメッセージ

妊娠中・産後は小さいトラブルを含めると何事もなく経過するという事はほとんどありません。特に初産婦さんは今まで経験したことのない、“初めて”づくしの経験になります。安心して妊娠・産後の生活を送るために、困ったときにはすぐ連絡できる医療機関があることもとても重要です。

当院では、母子医療センター見学ツアーを行っています。どこで出産するか悩まれている方、これから妊娠を考えている方を対象としています。当院を受診されたことがなくてもご参加いただけます。詳細は、当院ホームページからご確認ください。(残念ながら、現在は新型コロナ感染予防のため中止しています。再開の際は、ホームページやインス



タグラムでアナウンスいたします。) 当院の産婦人科インスタグラムでは、様々な情報を発信しています。是非ご登録ください！



産科ホームページ



産科インスタグラム

妊娠の最大の合併症といえば、何でしょうか？
妊娠高血圧、胎盤異常などいろいろありますが、関わる人すべてに影を落とす最も大きな合併症は「流産」をおいて他にありません。流産の頻度は平均すると全妊娠の約15%と言われており、一般の方が考えるよりも高率に起こり得る合併症なのです。

流産の原因の約80%は、胎児の染色体異常とされ、妊娠しても途中で自然に流産してしまいます。この場合は、現代の医療をもってしても治療することはできません。このような経験をされた方はご自身を責めずに、「今回の流産は避けられないものだった」ということを周囲の方も理解してあげてください。

胎児の染色体異常は、卵子や精子の染色体異常に由来します。卵子の染色体異常は、平均すると排卵した卵子の約25%、すなわち4回に1回は染色体異常卵が排卵されます。卵子は、女性が生まれる前から卵巣に大事に保存されており、その数は増えることはありません。それから卵子はどんどん消費されていき、その数は年齢とともに減る一方です。思春期以降は月1回程度の排卵が起こり始めますが、30歳代後半より染色体異常の頻度は増加します。これは、卵子が生まれてからずっと卵巣に保存されているため、排卵までの時間が長くなればなるほど、卵子は歳をとるからです。これが女性の年齢が高くなれば流産が増える理由と考えられています。

それに対し、精子にも平均10%程度の染色体異常があります。卵子との決定的な違いは、精子は約80日間かけて精巣で新しく作られることです。また、1回の受精に関わる精子の数は卵子とは比較にならないほど多いため、染色体異常精子が受精する可能性も低くなり

ます。つまり精子は、女性ほどは年齢の影響を受けないことになります。

流産の原因の残りの20%は、ご夫婦に流産をひきおこすような病態があり、そのために本来ならば生まれてくるはずの命が妊娠初期に失われてしまうと考えられています。原因としては、子宮の形態の異常、甲状腺などホルモン・内分泌の異常、抗リン脂質抗体症候群、血液凝固異常などがあります。

当院では、流産を2~3回と繰り返すカップルに対し、流産の原因がないかどうかスクリーニング検査をしています。保険診療の範囲内でスクリーニング検査を行い、その原因が明らかになった場合には適切な治療をご提案します。例えば、流産を引き起こす子宮形態異常に中隔子宮と呼ばれる子宮の中央に隔壁があるものがあります。このような疾患に対しては、短時間の内視鏡手術を行って中隔を取り除くだけで流産を防ぐことができるようになります(図)。また、内分泌異常があれば、当院内分泌内科での検査・治療を受けていただきます。抗リン脂質抗体症候群や血液凝固異常に対しては、妊娠中に血液をサラサラにする薬の内服や注射を行いながら、次の妊娠に備えていただきます。

詳細については担当医にご相談いただければご説明させていただきます。



JCHO 大阪病院フットケアチーム

フットケアチームって？

医療フットケアは、「足(フット)」の異常やトラブルを医師の指示のもと医療スタッフが早期発見・対処することにより、足の健康を維持することを目的としています。

2005年当時、皮膚科・形成外科の病棟には足の壊疽や切断を繰り返す糖尿病患者さんが多く、出来てしまった足潰瘍を治療するだけでは限界があると感じていました。そこで看護師が中心となり糖尿病足潰瘍に関する勉強会を始め、フットケアの取り組みがスタートしました。

2006年に血液透析室で皮膚科医と皮膚・排泄ケア認定看護師によるフットケア回診を始めました。

2008年に糖尿病合併症管理料が算定されるようになったことをきっかけに皮膚科にフットケア外来を開設し、2009年には糖尿病内分泌内科に糖尿病療養指導外来を開設して、フットケア療養指導を開始しました。

その後、さらに義肢装具室、循環器内科、心臓血管外科、形成外科がフットケアチームに加わり、月2回のフットケアミーティングを通して症例検討を行い、それぞれの専門性を発揮して患者さんの救済に努力しています。

「患者さんのいのちと暮らしを大切に、自分の足で歩ける人生を全力でサポートしたい」という熱意を持って、チーム医療をこれからも継続していきたいと思っています。



フットケア講演会

過去8回にわたり、毎年12月に院内・院外を対象にフットケア講演会を行ってきました。講演会では、外部講師や当院の医師によるフットケア関連の講演を聴講し、その後、模擬実技等実践的な会を行っています。多くの参加者から好評を得ています。

昨年度、講演会に参加された訪問看護師の方から、講演会参加後すぐにフットケア用品を揃え、実践されているとのご報告をいただきました。この会が地域の皆様のお役に立てていると感じ、私達もうれしく思っています。また、このような情報共有の場が必要だと実感もしております。

今年度は新型コロナウイルスのため、開催を断念せざるを得ず、この広報誌をもって代えさせていただきました。次年度は事情が許す限り、是非開催したいと考えております。



皆様と「地域の患者様の足を、
チーム医療で守っていきたい」、
と考えております。
これからもよろしくお願いいたします。

足の病気は予防が大事！

内科

糖尿病患者さんの増加、高齢化、合併症の進行、動脈硬化性疾患の併発などを背景に、足病変を認める患者さんは増加しています。

自覚症状が乏しい患者さんも多いため、定期的な検査・診察が必要です。

当院では、医師・看護師を中心に血糖コントロールの治療・支援とともに、足病変の早期発見と、重症化予防のためのフットケアを行っています。

皮膚科

皮膚科では

- ・蜂窩織炎（ほうかしきえん）
 - ・静脈うっ滞
 - ・なおりにくい傷
 - ・水虫
 - ・タコ、魚の目
 - ・爪のトラブル
- の診断治療を行います。

フットケア外来

フットケア外来では、足の状態を調べ、日常生活から足のリスクが回避でき、足病変の予防行動を患者さん自身が取れるよう関わっています。

最近では高齢患者さんの介護状況を整える必要もあり、ソーシャルワーカーや地域医療と連携してチーム医療で関わることが増加しています。

糖尿病患者さんが住み慣れた自宅で、自身の糖尿病と付き合いながら、できるだけ日常生活レベルを維持して生活できるように支援しています。

看護師は手術や血管内治療などの急性期看護から、創傷処置や糖尿病ケア・透析ケアなどのセルフケア支援、在宅療養に即した地域連携など、外来～病棟の看護師が一丸となり関係部署との連携を行いながら看護を行っています。

透析室

透析室では、足に関する治療や手術、血管内治療を受ける透析患者さんの透析治療、ケアを提供しています。

また、透析導入になった患者さんには自己管理指導の1つとして、足を見る重要性を説明し、セルフケアとして爪切りや清潔保持など指導をしています。

これからも関係各部署と連携しながら、足の病変予防と早期発見に努めていきます。

義肢装具室

靴のフィッティングの確認、履き方の指導、足に合う靴の紹介、フットケアグッズの紹介、必要な場合は型取りをしてインソールの作製を行います。

万が一切断した場合は義足の作製も行います。

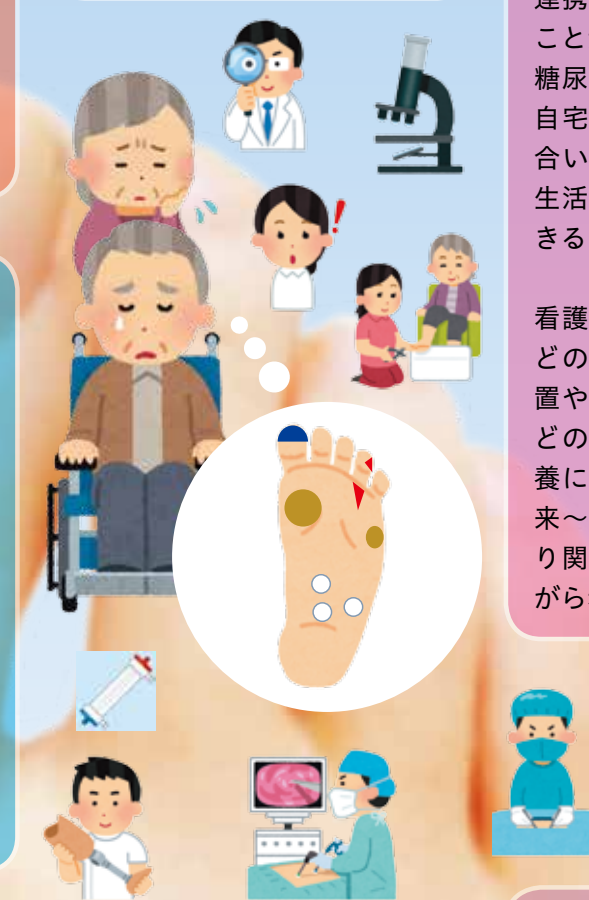
循環器内科 心臓血管外科

血管病変による血流不足で下肢潰瘍が悪化した場合、循環器内科はカテーテルで血管内治療を、心臓血管外科はバイパス手術を行い、血流を改善させることにより潰瘍を治療し、下肢切断を避けるお手伝いをします。

形成外科

足の感染や痛みがどうしても解決できない場合は、悪い部分を広めに取り除いて治癒を促進させる方法もあります。

最近では持続吸引機を用いて傷を自動的に洗浄しながら治療する装置も開発され、必ずしも大手術ばかりではなくなっています。



診療ご予約は JCHO大阪病院 地域医療連絡室 (TEL06-6441-5451 代表) まで

当院の活動が下記メディアで紹介されました

新聞記事

新聞名	掲載年月日	掲載タイトル	内容
読売新聞	2020.10.25(日)	病院の実力「胃がん」 (2019年治療実績)	全摘、幽門側、幽門保存、噴門側の胃切除手術(30件)、うち腹腔鏡手術(9件)、手術中の迅速病理診断(28件)、内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)(162件)
読売新聞	2020.11.22(日)	病院の実力「肝臓がん」 (2019年治療実績)	開腹手術(14件)、腹腔鏡手術(19件)、焼灼(しょうしゃく)療法の患者数(22件)、肝動脈(化学)塞栓療法の患者数(42件)、分子標的薬で治療した患者数(13件)

Web サイト

サイト名	掲載年月日	内容
https://special.sankei.com/f/life/article/20210108/0002.html 産経ニュース(産経新聞社オンラインニュースサイト)	2021年 1月から	「with コロナ時代の健康相談」 一大阪病院・西田俊朗院長がお答えしますー (ネット掲載は毎月第2、第4土曜日) *上記サイトは産経ID会員限定(会員登録が必要)です。

出版物

タイトル	発行年月日	掲載ページ	内容
『頼れるドクター 2020-2021 大阪・堺 vol.4』 (発行:ギミック)	2020.12.25	P.82-85	「地域の病院レポート」に、当院、大阪病院が紹介されました。

テレビ出演

テレビ局・番組名	放映日	内容
関西テレビ「Mr サンデー」	2020.12.6(日)	当院のコロナ病棟での現状、看護の様子が放映されました。



- JR東西線
「新福島駅」下車徒歩約5分
※出口1にはエレベーター、出口2にはエスカレーターがございます。
※当院に一番近い出口3には階段しかございません。
- 京阪電車「中之島駅」下車徒歩5分
- JR環状線
「福島駅」下車徒歩10分
「野田駅」下車徒歩15分
- 阪神電車「福島駅」下車徒歩10分
- 地下鉄
千日前線「玉川駅」下車徒歩10分
- 市バス
大阪駅前 鶴町四丁目[55]方面「堂島大橋北詰」下車 すぐ
大阪駅前 西島車庫前[56]方面「福島西通」下車 徒歩5分
大阪駅前 西島車庫前[56]方面「大阪福島税務署」下車 徒歩5分
大阪駅前 船津橋[53]方面「堂島大橋」下車 徒歩5分
- タクシー
「大阪駅」より約10分



地域医療支援病院 日本医療機能評価機構認定病院/大阪府がん診療拠点病院

JCHO (ジェイコー) 大阪病院 信頼に応える医療

独立行政法人地域医療機能推進機構 (旧 大阪厚生年金病院)

〒553-0003 大阪市福島区福島 4-2-78

TEL (06)6441-5451 (代表) FAX (06)6445-8900

<https://osaka.jcho.go.jp/> この広報誌に対するご意見・ご要望は、当院広報委員会宛まで

大阪府「男女いきいき・元気宣言」登録事業者/「働きやすい病院」認定病院(第1号)/につけい子育て支援大賞受賞/女性のチャレンジ支援賞(内閣府)受賞



古くより四つ葉のクローバーは「見つけた人には幸運が訪れる」といふ言い伝えがあります。当院は患者さんや地域の皆様が幸せになるお手伝いができるよう四つ葉のクローバーの形を建物のモチーフにしております。